

多変数の微分積分学1 第23回

桂田 祐史

2011年7月21日(木)

この授業用のWWWページは

<http://www.math.meiji.ac.jp/~mk/lecture/tahensuu1-2011/>

1 多変数関数の最大最小問題やりかけの問題

極値問題の最初に、

$$(1) \quad f(x, y) := 3x^2 + 2y^2 + 2xy - 2x - 2y + 1$$

の、

$$(2) \quad K := \{(x, y) \in \mathbf{R}^2; x \geq 0, y \geq 0, x + y \leq 1\}$$

における最大値、最小値を求めよ、という問題を提示した。

f の \mathbf{R}^2 での極値を求めてみよう。 $\nabla f(x, y) = 0 \iff (x, y) = \left(\frac{1}{5}, \frac{2}{5}\right)$ 。この点で Hesse 行列は正値であるので、 f は狭義の極小になることが分かる。極小値 $f\left(\frac{1}{5}, \frac{2}{5}\right) = \frac{2}{5}$ 。

定理 1.1 (Weierstrass の最大値定理) コンパクト集合 K で定義された連続関数 $f: K \rightarrow \mathbf{R}$ は、必ず最大値と最小値を持つ。

系 1.2 K が \mathbf{R}^n の空でない有界閉集合とするとき、連続関数 $f: K \rightarrow \mathbf{R}$ は必ず最大値と最小値を持つ。

(2) の K は明らかに閉集合である (多項式関数 (それは連続!) と \geq, \leq で定義されている)。「有界」については定義を思い出そう。

定義 1.3 (有界集合) $A \subset \mathbf{R}^n$ とする。 A が有界であるとは、

$$\exists R \in \mathbf{R} \quad \text{s.t.} \quad \forall x \in A \quad \|x\| \leq R$$

が成り立つことをいう。

A が有界であるとは、要するに、原点を中心とする十分大きな半径 R の閉球 $\overline{B}(0; R)$ に A が含まれることである。

(2) の K は、

$$K \subset \overline{B}(0; 1)$$

を満たすので、有界性の条件が $R = 1$ として成り立つ。ゆえに (2) の K は有界である。

従って Weierstrass の最大値定理によって、(1) で定義された f は K で最大値、最小値を持つ。

K を内部

$$K^\circ = \{(x, y) \in \mathbf{R}^2; x > 0, y > 0, x + y < 1\}$$

と境界

$$K^b = \overline{K} \setminus K^\circ = E_1 \cup E_2 \cup E_3 = (\text{三角形の周}),$$

$$E_1 := \{(x, 0); x \in [0, 1]\}, \quad E_2 := \{(0, y); y \in [0, 1]\}, \quad E_3 := \{(x, 1 - x); x \in [0, 1]\}$$

に分けて最大値、最小値を考える。

$$\max_{K^b} f = \max \left\{ \max_{E_1} f, \max_{E_2} f, \max_{E_3} f \right\}$$

であるが、

$$\max_{E_1} f = \max_{x \in [0, 1]} f(x, 0) = 2 \quad (= f(1, 0)),$$

$$\max_{E_2} f = \max_{y \in [0, 1]} f(0, y) = 1 \quad (= f(0, 0) = f(0, 1)),$$

$$\max_{E_3} f = \max_{x \in [0, 1]} f(x, 1 - x) = 2 \quad (= f(1, 0))$$

であるから、

$$\max_{K^b} f = 2 \quad (= f(1, 0)).$$

一方、

$$\min_{K^b} f = \min \{ \min_{E_1} f, \min_{E_2} f, \min_{E_3} f \}$$

において

$$\min_{E_1} f = \min_{x \in [0, 1]} f(x, 0) = \frac{2}{3} \quad (= f\left(\frac{1}{3}, 0\right)),$$

$$\min_{E_2} f = \min_{y \in [0, 1]} f(0, y) = \frac{1}{2} \quad (= f\left(0, \frac{1}{2}\right)),$$

$$\min_{E_3} f = \min_{x \in [0, 1]} f(x, 1 - x) = \frac{2}{3} \quad (= f\left(\frac{1}{3}, \frac{2}{3}\right))$$

であるから、

$$\min_{K^b} f = \frac{1}{2} \quad \left(f\left(0, \frac{1}{2}\right) \right).$$

f が $a \in K$ で最大になったとする ($f(a) = \max_K f$)。 $a \notin K^\circ$ である。実際、 $a \in K^\circ$ であれば、 $\nabla f(a) = 0$ 、 f は a で極大となるはずであるが、 K° で $\nabla f(x) = 0$ となる点は $x = \left(\frac{1}{5}, \frac{2}{5}\right)$ のみで、そこで f は狭義の極小となるので、極大とはなりえない。ゆえに $a \in K^b$ 。ゆえに

$$\max_K f = \max_{K^b} f = 2 \quad (= f(1, 0)).$$

一方、 $f\left(\frac{1}{5}, \frac{2}{5}\right) = \frac{2}{5} < \frac{1}{2} = \max_{K^b} f$ であるから、 f は K^b で最小値を取らず、 K° で最小値を取る。それは極小値であるから、 $f\left(\frac{1}{5}, \frac{2}{5}\right)$ でなければならない。

まとめると、 f は $\left(\frac{1}{5}, \frac{2}{5}\right)$ で最小値 $\frac{2}{5}$ を取り、 $(1, 0)$ で最大値 2 を取る。 ■

2 Lagrange の未定乗数法 (条件付き極値問題)

条件 $g(x) = 0$ の下での f の極大値、極小値を調べる。すなわち、 N_g を g の零点集合

$$N_g := \{x; g(x) = 0\}$$

として、 $f|_{N_g} : N_g \ni x \mapsto f(x) \in \mathbf{R}$ の極大値、極小値を求める。

例 2.1 $x^2 - y = 0$ 上の点と $(0, 1)$ との距離の最小値を求めよ。

$$f(x, y) = \sqrt{x^2 + (y - 1)^2}.$$

$g(x, y) := x^2 - y$ とおくと、 $g(x, y) = 0$ は $y = x^2$ ととけるので、

$$h(x) := f(x, x^2) = \sqrt{x^2 + (x^2 - 1)^2}$$

の最小値を求めることになる。 ■

この例のように $g(x, y) = 0$ が $y = \varphi(x)$ と解ければ簡単である。

定理 2.2 (Lagrange の未定乗数法) Ω は \mathbf{R}^2 の開集合、 $f: \Omega \rightarrow \mathbf{R}$ 、 $g: \Omega \rightarrow \mathbf{R}$ は C^1 級の写像、 $N_g := \{x \in \Omega; g(x) = 0\}$ とおくと、

$$\nabla g(x) \neq 0 \quad \text{on } N_g.$$

条件 $g(x) = 0$ の下で、 f は $a \in N_g$ において極大となるならば、

$$\exists \lambda \in \mathbf{R} \quad \text{s.t.} \quad \nabla f(a) = \lambda \nabla g(a).$$

λ のことを Lagrange の未定乗数 (Lagrange multiplier) と呼ぶ。例えば $a = (\alpha, \beta)$ とするとき、 α, β, λ は

$$\begin{aligned} f_x(\alpha, \beta) &= \lambda g_x(\alpha, \beta), \\ f_y(\alpha, \beta) &= \lambda g_y(\alpha, \beta), \\ g(\alpha, \beta) &= 0 \end{aligned}$$

を満たす。3つの未知数 λ, α, β に関する3つの方程式である。
証明 仮定

$$\nabla g(a) \neq \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

より

$$\frac{\partial g}{\partial x}(a) \neq 0 \quad \text{or} \quad \frac{\partial g}{\partial y}(a) \neq 0.$$

(i) $\frac{\partial g}{\partial y}(a) \neq 0$ の場合. 陰関数の定理から、点 a の近傍で

$$g(x, y) = 0 \iff y = \varphi(x)$$

と y について解けて

$$\varphi'(x) = -\frac{\frac{\partial g}{\partial x}(x, \varphi(x))}{\frac{\partial g}{\partial y}(x, \varphi(x))}$$

となる。そこで

$$h(x) := f(x, \varphi(x))$$

とおくと

$$\begin{aligned} h'(x) &= \frac{\partial f}{\partial x}(x, \varphi(x)) + \frac{\partial f}{\partial y}(x, \varphi(x))\varphi'(x) \\ &= \frac{\partial f}{\partial x}(x, \varphi(x)) + \frac{\partial f}{\partial y}(x, \varphi(x)) \left(-\frac{\frac{\partial g}{\partial x}(x, \varphi(x))}{\frac{\partial g}{\partial y}(x, \varphi(x))} \right). \end{aligned}$$

h は α で極値となるから $h'(\alpha) = 0$. $(\alpha, \varphi(\alpha)) = (\alpha, \beta) = a$ に注意して

$$\frac{\partial f}{\partial x}(a) - \frac{\frac{\partial f}{\partial y}(a)}{\frac{\partial g}{\partial y}(a)} \cdot \frac{\partial g}{\partial x}(a) = 0.$$

ここで λ を

$$\lambda = \frac{\frac{\partial f}{\partial y}(a)}{\frac{\partial g}{\partial y}(a)} \quad \text{i.e.} \quad \frac{\partial f}{\partial y}(a) - \lambda \frac{\partial g}{\partial y}(a) = 0$$

とおくと

$$\frac{\partial f}{\partial x}(a) - \lambda \frac{\partial g}{\partial x}(a) = 0.$$

まとめると

$$\nabla f(a) = \lambda \nabla g(a).$$

(ii) $\frac{\partial g}{\partial x}(a) \neq 0$ の場合. 今度は $g(x, y) = 0$ を x について解けばよい。後は同様である。 ■

(準備中)